

CIEC 第 74 回研究会報告

テーマ： 多言語 e-learning システムの開発と教育実践

日時： 2008 年 3 月 29 日（土）13 時 00 分～17 時 00 分

場所： 大学生協会館 201-203 会議室

司会： 野澤和典（立命館大学）

参加人数： 31 名

今回の研究会は、昨年度に引き続き、会員各自が開発した e-learning システム、教材の内容などをポスターセッションのスタイルで発表していただくものであった。前回のポスター発表と異なる部分は、英語のみならず、他の外国語も含めた多言語学習コンテンツを開発対象としている点である。さらに、メーカーからのプレゼンテーションも行なわれ、会員相互の最新技術情報交換の機会も提供された。

3 セットのプロジェクタとスクリーンが壁側に並べられ、2 セッションに分けたポスター発表形式で進められた。一人 20 分を基本としたプレゼンテーションと質疑応答のスタイルで、各セッション 3 件ずつの発表があった。

第 1 セッションの 1 件目は、立命館大学の松田憲氏による「アバター・チャットを利用



した Immersive Learning の可能性」であった。要旨（発表者提出文書より）は、「Immersive Learning とは、言語教育におけるイマージョンと同様に、書物などを通じて間接的に学ぶのではなく、対象言語の世界／学習対象の世界に没入して、実地において学ぶことと考えられるが、その際に、通常ネットワーク上の仮想空間を構築して、学習者がアバターとなってそこに入り

込み、この空間が実地の学びの場となっているものだと言えるだろう。典型的なものは、現在は始まったばかりの Second Life の教育利用であるが、今回の発表では、フリーソフトで簡単に作成できる 2D の仮想世界の中で、アバターを作成してチャットを行う事例を紹介したい。」であり、理論的背景とともにアバター・チャットの作成方法が紹介された。

2 件目は、慶應義塾大学の境一三氏による「振り返りと気づきの場としての LMS・ドイツ語教育の現場から-」であった。要旨（発表者提出文書より）は、「およそ教育の目的は、自ら学習目標を設定し、目標達成のための学習計画を立ててそれを実行し、且つ自らチェックすることのできる自律学習者を育てることと言ってよいだろう。言語教育の目的も自律的言語学習者を育てることに他ならない。そのためには、まず教員の指導の下、自らの学習を振り返る活動と言語と学習



に対する気づきを高める活動を不断に行う必要がある。本発表では、そうした活動がより良く行われうる場としての LMS の具体的活用例をドイツ語教育の現場から紹介する。」であり、LMS を自律学習者育成への「しかけ」と捉え、自律学習者は同時に協調学習も可能であると解説された。

3 件目は、アップルジャパンの坂本憲志氏による「アップルが提供する m-learning 環境」であった。要旨(発表者提出文書より)は、「コンピュータやネットワークの発達によって学習環境は多様に変化してきました。また、インフラが整備されるに従って、教育メディアが充実し学習者は益々受け身になってしまう懸念もでてきました。Push 型のイメージの強い e-learning に対し m-learning はより Pull 型に近く、より学習者の学習意欲に依存する部分が大きくなるように感じます。本日は、それを実現するツールとしての、Podcast に加え、学習者の創造性を刺激した学習事例もご紹介いたします。」であり、時代とともに学習



形態も変わっていくが、一番大きな変化は、学習者の学びの姿勢であると述べられた。

第 1 と第 2 セッション間に、アップル新製品のハンズオンが設定され、同時にデジタル教材の作成方法、ポスト・プロダクション・ソフトウェアの Final Cut を使ったマルチビデオクリップの簡単な編集方法などが紹介された。

続く、第 2 セッションの最初は、大阪府立大学の清原文代氏による「iPod & Podcast で中国語」であった。要旨(発表者提出文書より)は、「Podcast で中国語：清原文代・顧春芳『大阪府立大学中国語ポッドキャスト旅行会話編』では初級者向けの音声教材と文法解説プリントをインターネットで無料配信中である。音声は 1 回当たり 1〜2 分、音声だけでも意味がわかるように日本語訳も録音されている。更に iPod に転送すれば音声再生中に中国語スクリプトを表示させることもできる（但し一部の機種は除く）。

<http://www.las.osakafu-u.ac.jp/podcast-lang/zh/travel/index.html> を参照。 iPod で中国

語：清原文代『リズムで学ぶ三文字中国語』（アルク 2007 年）は入門〜初級者を対象とした CD-ROM 付き書籍である。CD-ROM には iPod やパソコンで再生できるアニメと音声収録されている。アニメでは 3 文字のフレーズが 8 ビートのリズムに乗って読まれると同時に、漢字やピンイン（中国語の表音ローマ字）がリズムに合わせて踊り、音声と文字が一体化した形で学ぶ。



1 フレーズ 30 秒と短い上に、リズムの乗せてあるために記憶に残りやすく楽しく学習することができる。<http://www.alc.co.jp/china/study/rhythm/index.html> を参照。」であり、2 トピックとも製作工程および学習方法が明解に解説されており、配布資料も発表時間内で説明できない部分が十分に補われていた。

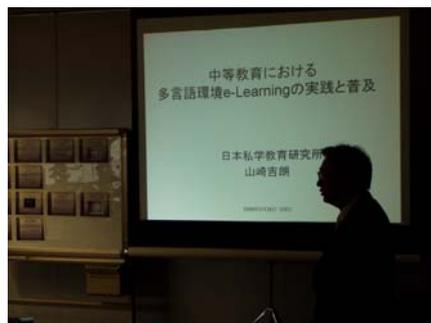
2 件目は、長崎外国語大学の三枝裕美氏による「多言語 e-learning 教材の開発」であった。要旨(発表者提出文書より)は、「長崎外国語大学・短期大学では本学の多言語環境を活



かした e-learning 教材『長崎・言葉のちゃんぽん村』を開発、公開している。2 部構成からなり、授業の補完を目的とした第 1 部では教科書全部を Web 化し、自習・復習に役立てている。フランス語、スペイン語、中国語の 3 ヶ国語がある。第 2 部は日・英・仏・独・西・中・韓を相互対照した 7 ヶ国語講座で、単語編と会話編の 2 種類がある。こちらの 7 ヶ国語講座は学外の一

般の方々に多言語を体感してもらうのが目的である。ポッドキャストでも配信している。」であり、大半がデモを交えて行われた。中国語では、アニメーションを使って舌の位置が視覚的に理解できるように工夫されており、英会話ではビデオ Podcast も作成されていて、モバイル学習の効果についてうかがい知ることができた。

最終発表は、日本私学教育研究所の山崎吉朗氏による「授業と連動した e-learning の実践と検証」であった。要旨(発表者提出文書より)は、「2 年度 (2006 年度、2007 年度) に亘って、中等教育の語学教育で e-learning を利用、検証、またその普及に努めている。2006 年度は授業と連動しない形での利用、2007 年度は授業と連動した形での利用で、その利用度、成果等を比較、検証している。さらに昨年度からは、松下教育研究財団の助成を受け、地方の協力者の学校で問題作成を行い、演習を行うという試みを少しずつ進めている。次年度は現在の言語 (フランス語) に加え、韓国語、ロシア語、中国語、ドイツ語での問題作成、演習を行う計画を進めている。」であり、現場での状況に応じて長期的に進められてきた実践報告がなされた。フランス語だけでなく多言語での利用も呼びかけられ、ICT の語学教育への幅の広がりが示された。



年度末で多忙な時期でありながらも関東を中心に多方面からの参加者があり、発表者に対してのみならず参加者同士での活発な意見交換がなされ、活気溢れる実り多き研究会であった。

(文責：吉田晴世)